

教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学においてスマート・ウェブ・サーベイによる共通の学修行動調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別に詳細な分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析が施されます。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、回答した全学生を総計した結果の一端について公開し、現に学んでいる学生たちの自らの学修に関する生の声の集約を、広く社会にお示しし、その情報共有を図ります。

今回は2年目の調査で参加大学は女子大学を中心に7大学、8000名以上の大学生が寄せた回答結果からはいくつもの発見と確認ができました。以下、「経験」以降の結果はこの調査のうち、1、3年生を調査対象にした5大学（津田塾大学・帝京大学・東京女子大学・奈良女子大学・日本女子大学）の女子4027名の集計結果です。どうぞご参照ください。

この枠内と右に示した結果は2016年に実施したALCS調査全体のデータ諸元です。

実査期間（全体） 2016年10月13日 ～17年2月3日 各大学2～3週間程度

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

調査大学数 7

回収数 8805

有効回収とは選択式回答79問について回答率が60%以上であった回答

回答者属性構成 文系77% 理系23% 1年生について
1年生67% 3年生33%



この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によって別の学年での実施も可能としています。

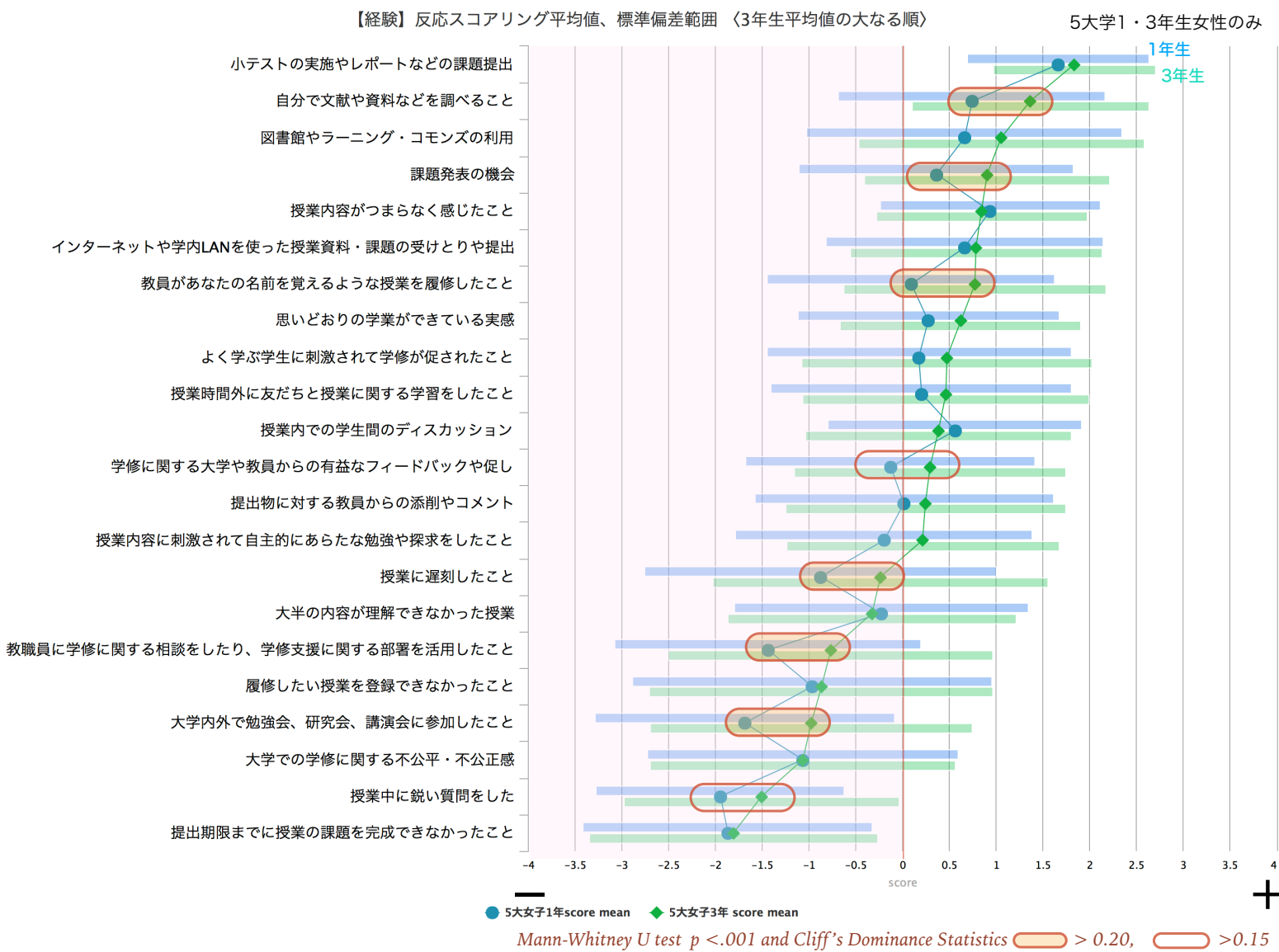
参加大学（名称の50音順）



経験

大学の授業や学修に関する経験

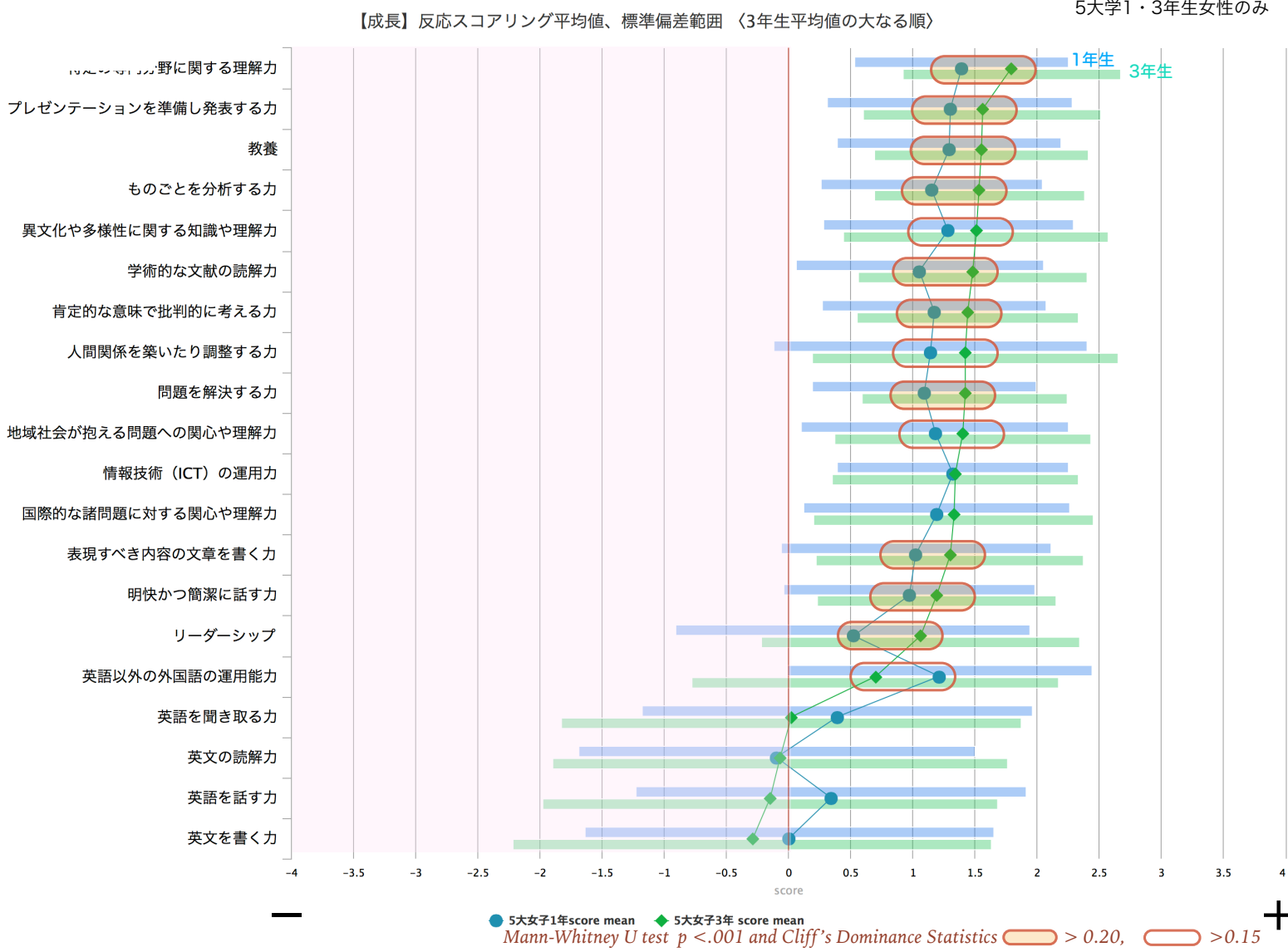
最近の学生は授業の課題提出や小テストなどで、その準備学修や提出準備に結構追われている様子が伝わってきます。そのために図書館や学修支援環境もよく利用され、修学経験が長じるほどおのずと発表経験も重なり、教員との距離も近くなるようすが有意差をもって確かめられました。授業内容につまらなさを感じる事が比較のあるようですが、大半の学生が概ね思いどおりの学業ができています、としており救いです。発表やディスカッションの機会が相応にあって授業の能動性は概ね認められるものの、鋭い質問の経験や授業外での学習機会への参画についてははっきりと消極的である状況もみえます。



成長

入学時に比した成長

成長感についてはほとんどの項目で、1年に比して3年生で有意に高い評価をしており、一応の安堵ができます。ただ、全体をみると、平均値において英語を主体に語学に関する成長感が揃って衰微している様子がわかります。しかしこれらはいずれも標準偏差の幅が広く、個人差が大きいことが読めます。よって学年間で平均値に差があっても有意差は生じていません。この個人差は学生の専攻によって必然的に生ずることゆえ（最も成長著しく感じていることが特定の専門分野の理解力だとしていることはそれを間接的に裏付けています）、この結果でも教学の「グローバル化」施策にもかかわらずなぜ? の疑問はある程度拭い去ることができます。また成長感の高位に学年間有意差をもって「教養」やプレゼン力、分析力などがあげられた点は現代の大学としては、相応の成果として受け止めることができるはずで



時間

1日あたりの

約3/4の学生が従事しているアルバイト等の勤務時間が長いことがわかります。それに比して授業外の授業に関係する学修時間と授業に関係しない学習時間の長さはおよそ1日100分ですから短くみえるかもしれません。しかし、この値は「週あたり」の時間数で尋ねている他の学生調査に比較するとおよそ5割増しです。つまり従前になく長く学んでいる値です。現在、これについて調査対象大学に特有の結果か、問い方の問題か、時間尺度の妥当性を含め、複数の方向から検討を進めています。

授業外学修時間



授業に関連しない学習時間



アルバイトなど有給の仕事時間

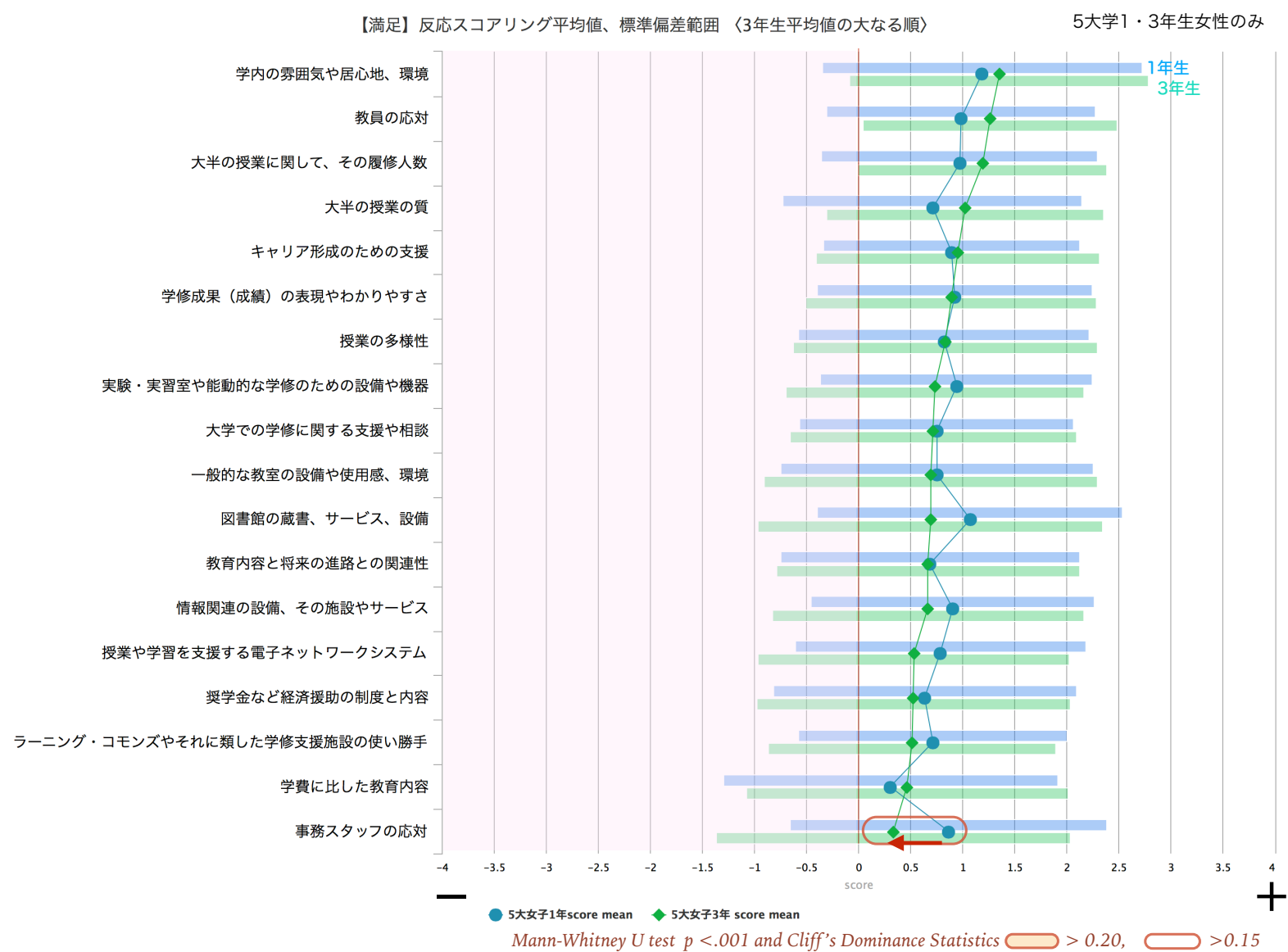


満足

教育/設備/環境/制度への満足度

まずこれらの満足感については2年間の修学経験差によらず回答差異がほぼなかったこと、全項でその平均値が肯定域に入ったことが確認できます。

一点目立つ点は相対的にみて「事務スタッフの対応」については厳しい評価が認められ、しかも修学期間が長ずるほど統計的に有意な差をもってより低く評価されたことが気になるところでしょう。教員の対応が結構高く評価されていることと対比的ですが、この点、もとより学生と事務スタッフが接する場面での用向きの性質ゆえ、厳しく評価されがちになることはあるでしょう。しかし、大学全体の一層の改善という観点からはSDの主題のひとつでしょうし、そうした際に大学間比較でこの点で高く評価されている大学とそうでない大学との比較によって何か新鮮な示唆が得るといったことも期待できそうです。



希望

在学中に望むこと

上述したように、入学来の教学/学修成長感として専門分野の理解と教養が増大したという自覚が高いことが確認され、かつこの先の在学中の希望でも学年によらず、回答分散が相対的に低いかたちで幅広い知識、教養を身につけること、および専門分野の養いが標準偏差全域で肯定域に納まったことが確認できます。きわめてオーソドックスながら、大学機能の存在意義がその最大の受益者に実経験としても、この先の希望としても明確に認識されていることが捉えられました。

反面、回答の正負の質には違いがあるものの、資格取得、ボランティア活動、アントレプレナーシップの養いに対する希望は初年次に比して3年次に有意に減退する事実も認められ、これら諸策の効力やメッセージ性の鍵は初年次にあることもつかむことができました。

